

し ょ う り ん じ あ と

# 聖林寺跡

広域営農団地農道整備事業上水内北部地区油沢橋梁工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2011年3月

長野市教育委員会





調査地遠景（南東から）



調査区空撮写真



耳環写真



## 序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、古くから人々の足跡が刻まれています。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできない貴重な財産です。中でも土地に埋蔵されている遺跡や遺物は、まさにその土地に刻まれた歴史であり、当時の人々の暮らしぶりを私たちに伝えてくれます。

本書に所収しております聖林寺跡は、長野市豊野町西部の丘陵地帯中腹に立地しており、中世には太田荘と呼ばれた莊園の中心地であったとされております。また、周辺は旧石器時代から現代に至るまで、人々の多様な活動が繰り返し行われてきた土地でもあります。

今回の発掘調査は、広域営農団地農道整備事業に伴うもので、調査範囲は比較的狭いものでありますましたが貴重な構造・遺物が発見されました。ここに長野市の埋蔵文化財第128集として刊行いたします本書には、その成果が詳しく掲載されております。連續と継られてきた人々の歴史のほんの一部にすぎませんが、地域史解明の一助としてお役立ていただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力ならびに発掘調査に際して多大なご助力を賜りました長野県長野地方事務所の皆様、日頃より地域の文化財保護にご尽力いただき、本調査では発掘作業に携わっていただきました聖林寺大悲闍谷跡保存会の皆様、また報告書刊行に至るまでご支援ご指導いただきました関係機関・諸氏に厚く御礼申し上げ、本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

平成23年3月

長野市教育委員会

教育長 堀内 征治

## 例　言

- 1 本書は、長野市豊野町豊野における開発事業「広域営農団地農道整備事業上水内北部地区油沢橋梁工事」にともない、平成22年度に発掘調査及び整理調査を実施した、埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査事業は、委託者　長野県長野地方事務所長 小林守夫と受託者　長野市長 鶴澤正一との「埋蔵文化財発掘調査委託契約」に基づき、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査地籍は、長野県長野市豊野町大字豊野字東字山2961-4であり、開発事業の総面積は約3,000m<sup>2</sup>、うち埋蔵文化財の保護対象面積は1,000m<sup>2</sup>、発掘調査面積は520m<sup>2</sup>である。
- 4 発掘調査は平成22年4月6日から平成22年5月7日にかけて実施した。
- 5 造構測量は株式会社写真測図研究所に委託した。造構図中の座標・標高は、平面直角座標系の第VII系座標値（日本測地系2000）と、日本水準原点の標高に基づく。
- 6 現場における発掘調査は、塙原の統括のもと遠藤が担当し山本が補佐した。整理調査は各調査員、作業員が下記のとおり作業を分担した。

整理作業	遺物実測・清書	柳生、矢口
造構図整理・清書		塙原、矢口
写真撮影		塙原、柳生、矢口
- 7 遺物図は個別に縮尺を明示した。なお、須恵器は断面を黒塗りで表している。
- 8 本書の編集・執筆は第III章第3節を柳生が、それ以外を塙原が担当した。
- 9 調査によって得られた諸資料は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターで保管している。なお、遺物注記や諸記録表題としての略記号は「S R Z」としている。

# 目 次

## 序 文

## 例 言 ・ 目 次

第Ⅰ章 調査の経過	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌（抄）	3
第Ⅱ章 調査地周辺の環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	6
第Ⅲ章 遺構と遺物	8
第1節 調査概要	8
第2節 遺構	10
1 集石	
2 土坑	
3 土器集中地点	
第3節 遺物	14
1 土器・土製品	
2 石製品	
3 金属製品	
第Ⅳ章 結 語	18
報告書抄録 ・ 奥 付	

## 挿図目次

図1 調査地の位置 (1:25000) .....	1	図7 古墳時代後期の遺構と遺物.....	13
図2 豊野地区周辺の地形と遺跡の分布.....	5	図8 土器・土製品実測図および拓影.....	16
図3 聖林寺跡伝承地位置図.....	6	図9 石製品実測図.....	17
図4 調査区と試掘坑の位置.....	8	図10 金属製品実測図.....	17
図5 調査区平面図 (1:150) .....	9	図11 豊野周辺の後期古墳の分布.....	18
図6 集石周辺状況図 (1:60) .....	11		

## 表目次

表1 出土遺物観察表.....	15
-----------------	----

# 第Ⅰ章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経過

### 埋蔵文化財保護協議

市教育委員会文化財課 埋蔵文化財センター（以下、当センター）では埋蔵文化財保護措置の適切な実施を図るため、毎年度府内各課へ建設・土木工事等の事業照会を行い、要保護措置事業の早期把握と埋蔵文化財保護の周知徹底に努めている。当該地に関しては平成18年度以降、市道豊野平出線道路改良事業に係って市総務部豊野支所から照会があり、平成21年度は事業着手前の試掘調査が必要であるとの回答が当センターよりなされていた。なお、当該調査の直接的な起因事業は長野県長野地方事務所（以下、地方事務所）が事業主体となる広域営農団地農道整備事業であるが、調査地は市道豊野平出線との交差部であり、両事業の進捗に伴って保護措置が実施されることとなつた。調査の実施に至る経過は次のとおりである。

- 平成21年11月16日 当センターにより広域農道部分の試掘調査を実施。一部に遺構・遺物の包蔵を確認。  
事業着手前に記録保存のための発掘調査の実施が必要と判断される。
- 平成21年12月8日～10日 当センターにより追加試掘調査を実施。発掘調査を必要とする範囲を決定。
- 平成22年3月15日 地方事務所長より文化財保護法第94条の1に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書（21長地農整第264号）が提出される。
- 平成22年4月5日 地方事務所長と長野市長との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結。
- 平成22年4月6日 現地における発掘調査に着手。



図1 調査地の位置 (1:25000)

## 第2節 調査体制

発掘調査委託業務[委託者] 長野県長野地方事務所長 小林守夫（長野市大字南長野南町686-1）

発掘調査委託業務[受託者] 長野市 長野市長 鶩澤正一（長野市大字鶴賀緑町1613番地）

調査主体者 長野市教育委員会教育長 堀内 征治

総括管理者 文化財課長 金井 隆子

総括責任者 埋蔵文化財センター所長 青木 和明

（庶務担当）係長 北村 嘉孝

職員 大竹 千春

（調査担当）係長 千野 浩

主査 小林 和子

主事 球原 秀之（調査員）

専門員 遠藤 忠実子（調査員）・山野井 智子・小林 由実・小山 夏奈・

山本 賢治（調査員）・高田 亜紀子・柳生 俊樹（調査員）

発掘作業員 江尻 正夫・金井 清敏・関 正勝・善財 克・中山 和夫・中山 秀代・橋本 正四郎・堀越 三裕・

丸井 茂・村山 信雄・山岸 逸彦・山崎 紀元・和田 文一郎（聖林寺大悲闇古跡保存会）

整理調査員 矢口 忠良

測量業務委託 株式会社写真測図研究所

発掘調査事業の委託者である長野県長野地方事務所関係各位におかれましては、埋蔵文化財保護に対する深いご理解のもと、調査を円滑に実施できるようご配慮を賜った。発掘作業においては、日頃より地域の文化財保護にご尽力いただいている聖林寺大悲闇古跡保存会の皆様に多大なるご支援を賜った。また、整理作業にあたっては、飯島哲也氏、市川隆之氏、伊藤友久氏に懇切なご指導を賜った。ご協力いただいた関係各位に記して感謝申し上げたい。



### 第3節 調査日誌（抄）

2010（平成22）年

4月6日(火) 晴後曇 調査用コンテナハウス等の搬入・設置。

4月7日(水) 雨 調査用諸器材の搬入。雨天のため重機による表土除去作業は中止。

4月8日(木) 晴 発掘作業員とミーティング。重機による表土除去作業開始。

4月9日(金) 曇 重機による表土除去作業。

4月12日(月) 雨 雨天により作業中止。

4月13日(火) 晴 重機による表土除去作業中に棒状鉄製品が出土。表土除去作業終了。

4月14日(水) 雨後曇 悪天候により作業中止。

4月15日(木) 雪後曇 降雪により作業中止。

4月16日(金) 曇 作業員による掘削作業を開始。集石および土器集中地点を検出。

4月19日(月) 晴 集石の垂直分布を確認するためのトレンチを設定。包含層の掘下げ。

4月20日(火) 曇 トレンチを北側へ拡張。集石のうち、大型の礫は地山に接することを確認。

4月26日(月) 晴 集石中より耳環と不明鉄製品が出土。

4月27日(火) 曇後雨 地山地形の確認のためトレンチを西側へ拡張。

4月30日(金) 晴 調査区の空中写真撮影と遺構測量を実施（業務委託）。作業員による掘削作業を終了。

5月6日(木) 晴 測量図結線作業。

5月7日(金) 晴 調査用諸器材の撤収。コンテナハウス等の撤去。現場での作業完了。



## 第Ⅱ章 調査地周辺の環境

### 第1節 地理的環境

調査地が存在する旧豊野町は、長野盆地の北西縁部にあたり、上越や中越へ向かう玄関口として、交通上の要地を占めている。地形的には、旧町域の東側を流れる千曲川・浅川沿いの沖積平野と、鳥居川下流域に形成される河岸段丘、そして千曲川に平行するように大小の丘陵が連続する北西側の丘陵地とに大別される。また、長野市南部の千曲川左岸では犀川扇状地・櫛花川扇状地・浅川扇状地などの大規模な扇状地が発達するのに対し、旧豊野町を中心とする市北部では盆地の沈降作用の影響により山地からの土砂の押し出しが弱く、扇状地の形成が非常に弱いことが特徴である。これは、千曲川対岸の百々川・松川・夜間瀬川などが大規模な扇状地を形成していることも対称的で、千曲川は右岸からの押し出しを受け、柳原から赤沼に至る大規模な自然堤防と、南郷から豊野にかけての広大な後背湿地を形成している。現在の豊野地区では、これらの沖積平野にまで居住域が広がっているが、本来は千曲川や浅川の氾濫によって形成された地形で、過去には幾度かの水害に見舞われている地域でもある。一方、丘陵地帯を見ると、盆地から山地にむけて規模の異なる丘陵が階段状に連続していることがわかる。すなわち、豊野地区周辺では、中尾丘陵のような盆地との比高が50m以下の低位丘陵、比高60~100mで展開する浅野丘陵、そして150m以上の比高をもつ大規模な豊野丘陵、というように区分され、それぞれが局所的な小丘陵を含み、生活に適した平坦面を有している。さらに丘陵地帯から流れる三念沢や油沢川などは沖積平野に向けて小規模ながら扇状地を形成しており、近世以前には水害を避けるため、こうした扇状地や丘陵上の平垣部が主な生活域となっていた。このような土地利用のあり方は、長野盆地西縁部に発達する多くの褶曲構造や断層によって大きな影響を受ける豊野地区の特徴のひとつと言える。

今回の調査地は豊野丘陵端部に位置する小丘陵の平垣面上に位置し、頂部の標高は436mを測る。現在、調査地の北側には豊上線が通っているが、豊上線北側の平垣部は近代初頭まで中島を配した池であったことが『豊野村史（明治15年『長野縣町村誌』所収）』によって知られる。その後、水田となり、昭和60年代に埋め立てられ現在は果樹園として利用されている。丘陵地帯には大久保池や神宮寺池などの灌漑用池がいくつもあるが、これらは盆地西縁部と平行するよう点在しており、断層活動によって生じた凹地などを利用したものと考えられる。おそらく調査地付近にかつて存在した池も大久保池と同様の要因でつくられたものと思われる。また、調査地である小丘陵の西側は油沢川による開拓谷となるが、東から南側にかけては比較的緩やかな斜面地形をなし、いくつかの小丘陵に連続している。

また、豊野丘陵と浅野丘陵には豊野層と呼ばれる第四紀湖成層のうち、親音山シルト砂部層が厚く堆積する。このシルト層はしばしば大規模な地すべりを引き起こしており、『油沢山縁起井序』には、応仁2年（1468年）に聖林寺の北山が崩れ山門がごとく埋没した、という伝承が残されている。この記述の当否は定かではないが、伝承は当地の地質状況を端的に示すものといえる。また、油沢川の源流ともなっているように、当地においては古くから油微があり、油沢川では現在でも縁に油が付着し油膜が水面に浮かぶ様子が観察できる。ちなみに、発掘調査終了後に行われた油沢橋脚工事では、油沢川左岸から調査地の地下へ延びる横坑の入り口が露呈し、直後は油分を多く含んだ地下水を採取することができたらしく。調査地周辺では明治初頭から戦前にかけて数回にわたって採油を目的とした掘削が行われており、今回発見された横坑もそれに関連するものと思われる。これらの掘削はいずれも成功には至らなかったようであるが、明治維新を経て近代化を目指した日本を象徴する遺産のひとつとして記憶にとどめておきたい。



- 1 聖林寺跡 2 日影川谷遺跡 3 猪山城古墳群 4 白山遺跡 5 竹原遺跡 6 どうろく神坂遺跡 7 蟻ヶ堀塙跡 8 梅楽寺跡 9 二ッ石遺跡 10 小軒井遺跡  
 11 長滑寺跡 12 大倉城跡 13 北裏遺跡 14 寅羽田遺跡 15 八幡社遺跡 16 板橋遺跡 17 下銀湯跡 18 手子塚城跡 19 鶴御道跡 20 手子塚道跡  
 21 方彌 22 岩の堂道跡 23 南曾集古墳 24 南曾集古墳 25 中島遺跡 26 梅堤遺跡 27 楓音堂遺跡 28 立石ヶ丘古墳 29 立石ヶ丘遺跡 30 向平遺跡  
 31 上浅野遺跡 32 山崎古墳 33 大川路遺跡 34 大道筋遺跡 35 町反遺跡 36 松ノ木下遺跡 37 西仲遺跡 38 小瀬遺跡 39 ごぼう山遺跡 40 月光寺遺跡  
 41 堤遺跡 42 堀廻跡 43 泉平塚跡 44 泉平塚跡 45 泉平1号古墳 46 猪平2号古墳 47 泉平3号古墳 48 西敏寺跡 49 西嚴寺遺跡 50 松樺古墳  
 51 大久保遺跡 52 大久保2号古墳 53 大久保2号古墳 54 上伊豆毛道跡 55 上伊豆毛古墳 56 八雲台1号古墳 67 八雲台2号古墳 58 八雲台3号古墳  
 59 八雲台4号古墳 60 東宇山古墳 61 西宇山古墳 62 行人塚古墳 63 鮎徳寺跡 64 登野原跡 65 豊野道跡 66 中尾道跡 67 鰐守塙跡 68 鮎塙堂跡  
 69 上山1号古墳 70 上山2号古墳 71 上山3号古墳 72 上山4号古墳 73 驚寺古墳 74 滝岡塙古墳 75 郡林古墳 76 山ノ神塙跡 77 神塙殿古墳  
 78 稲戸古墳 79 北石遺跡 80 殿屋道跡 81 北土手下道跡 82 石村三日城跡 83 明神前道跡 84 萩野神社前道跡 85 萩野神社古墳 86 神宮寺跡  
 87 斎ノ平古墳 88 入石遺跡 89 五厘林遺跡 90 榛山古墳 91 中丁道跡 92 宮塙跡 93 里敷遺跡 94 虚空藏山古墳 95 鶴山遺跡 96 清水塙道跡  
 97 荒古旗塙群 98 荒古遺跡 99 荒古塙跡 100 十二削・長塙基塙群 101 鶴山遺跡 102 堀道跡 103 豊野一里塙 104 一里塙・鍋山旗塙群

図2 豊野地区周辺の地形と遺跡の分布

## 第2節 歴史的環境

今回の調査地は、中世太田荘の中心地であった神代郷内に位置しており、聖林寺伝承地として広く知られているところでもある。聖林寺に関する文献資料としては、近世に記された『油沢山縁起井序』があり、それによれば弘長2年（1262年）に最明寺入道（北条時頼）が回国中に四寸八分の千手観音を村人に授けたことにより創建され、応仁2年（1468年）の山崩れで埋没し、永正6年（1509年）に領西からきた僧西心により本尊が掘り出されて聖林寺として新たに建立され、境内一町五反、塔頭十二坊を擁して栄えたが、永禄年中（1558～1570年）の川中島合戦の兵火によって焼失したという。さらに後、長らく廢寺となっていたものを長沼村の靈仙寺門弟俊在阿闍利が享保14年（1729年）に上神代へ観音堂を移し、油沢山正行寺として再建したという。

上記の縁起は、俊在による再興の際に記されたもので、中世の記述に関しての信憑性は低いものである。とはいうものの、伝承地北側のテラス上には、周辺から出土したとされる板碑や五輪塔が百数十基並べられており、当地に中世寺院が存在していたことはほぼ確実視されている。また、伝承地の周辺には土壌状遺構や平坦面など自然に形成されたものとは想定しにくい地形がいくつか確認されており、『豊野村史』に記されている池跡の存在なども含めてかなり広範に寺域が展開していたと考えられている。ただし、これまでに聖林寺伝承地周辺で豊野町誌編纂などを目的とした試掘調査が2度実施されているが、いずれの調査においても遺構や遺物は発見されておらず、現在のところ考古学的に中世寺院が存在した証左は得られていない（倉石ほか1997、豊野町誌刊行委員会2001）。

また、当地に存在したであろう寺院については、中世太田荘の地頭であった島津氏と密接な関係にあったことがすでに指摘されており（牛山1994）。島津氏の神代郷における地頭支配に極めて重要な役割を果たしたことが予想される。また、寺院以外にも、聖林寺伝承地周辺には神代郷経営に関する諸施設が存在したことが予想されるが、現在のところ周辺での調査事例が少なく、それに比定される遺跡は発見されていない。

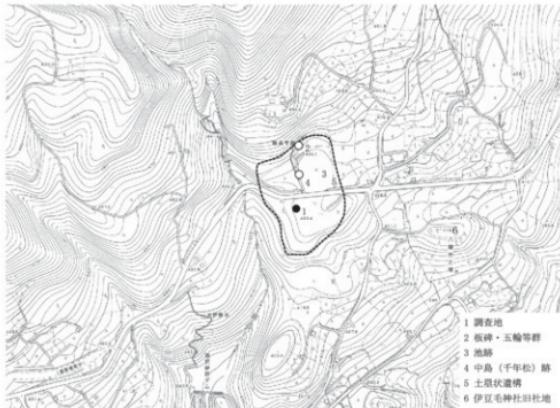


図3 聖林寺跡伝承地位置図（『豊野町誌5』掲載を一部改変）

一方、調査地周辺には八雲台1号古墳をはじめ、古墳時代後期に築造されたと考えられる古墳が14基分布しており、豊野古墳群として周知されている。なお、石地区周辺では権現沢と三念沢を中心に9基の後期古墳からなる石古墳群があり、さらに鳥居川下流域ではややまとまりが散漫ではあるが、山崎古墳・立石ヶ丘古墳・南曾峯古墳からなる鳥居古墳群がある。

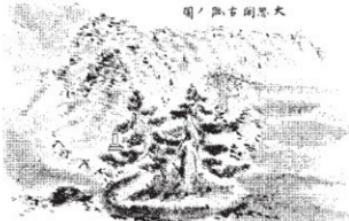
残念ながら、豊野古墳群に属するほとんどの古墳はすでに破壊を受けてしまっているが、八雲台1号古墳については唯一横穴式石室を残しており、また、石室内から出土したとされる耳環や管玉、勾玉等の装身具と土器類が伊豆毛神社宝物として現存している。土器類には7世紀前半に三河以東の東海地方西部で製作されたと考えられるフラスコ形長頸瓶が含まれているが、今回の調査でも破片資料ながら同種の須恵器が出土しており、注目される。その他、調査地の300m以内には直刀と鉄鎌が出土した東宇山古墳や、同じく直刀が出土したという八雲台2・4号古墳などがあり、豊野古墳群内においても比較的古墳の密集度が高い地区である。

これらの古墳を築いた人々の集落に関しては、これまでのところ明らかになっていない。ちなみに、同様に高い密集度を示す石古墳群周辺では、権現沢と三念沢が作り出した小規模な扇状地上に北石遺跡や明神前遺跡、北土井下遺跡などの古墳時代後期～奈良・平安時代にかけての集落があり、古墳群との対応関係が想定できる。豊野地区の古墳群に関しても、基本的には石古墳群と同じような対応関係が想定可能で、丘陵末端から沖積平野にかけて形成された油沢川の扇状地上に立地する豊野遺跡をその第一候補にあげることができる。

なお、豊野遺跡は中世神代郷の中心地であり、近世には飯山街道と松代街道が交差する神代宿として栄えたところである。このように一定の土地に古代から連續と人々が生活を続いていることも、豊野地区における歴史環境の大きな特徴のひとつと言えるだろう。



市指定記念物（史跡）「聖林寺跡・同五輪塔群」



豊野村誌掲載「大悲閣古跡ノ図」（『長野縣町村史』所収）

## 第III章 遺構と遺物

### 第1節 調査概要

今回の調査地は、市指定記念物（史跡）である五輪塔群から豊上線を挟んで約100m南側に位置する小丘陵の平坦面で、西隣を流れる油沢川との比高は7~10mほどになる。調査地周辺は全体として南向きの緩斜面をなしているが、踏査では一帯に自然地形とは考えにくい平坦面がいくつか認められ、事業着手に先立って試掘調査を実施したところ、第1・3号トレンチにおいて埋蔵文化財の包蔵が確認された。そのため、第1・3号トレンチを設定した平坦面約1,000m<sup>2</sup>について、記録保存を目的とした発掘調査が必要との判断に至った。なお、第6・7号トレンチでは埋蔵文化財の包蔵が確認できなかったが、地形的に第1・3号トレンチと同一の平坦面にあたることや、掘り込みを有さない建物礎石などが点的に存在する可能性も考慮に入れ、発掘調査範囲に含めることとした。

発掘調査により発見された遺構は、埋没古墳の残欠と考えられる集石と、それに関連すると思われる土器集中地点で、その他には土坑が5基見つかったのみである。遺構が検出されたのは調査区の北半で、南半については全く確認されなかった。



図4 調査区と試掘坑の位置

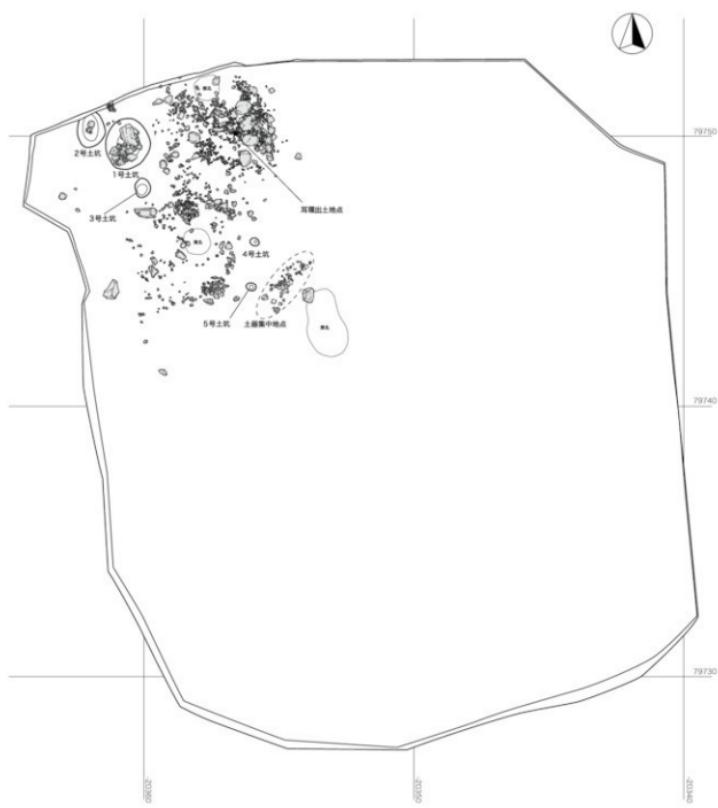


図5 調査区平面図 (1:150)

## 第2節 遺構

### 1 集石

調査区北側の9m×9mほどの範囲から、大小の礫が集中的に検出された。礫は最大径が40cm以上の大型の礫と、40～20cm程度の中型の礫、10cm以下の小型の礫とに分別され、大型・中型の礫は平均して地山層である黄色粘性シルト層の上面に接する一方、小型の礫のほとんどが暗褐色粘性シルト層中に包含されており、その多くは地山層より5～15cm浮いた位置で検出されている。

集石からは、古墳時代後期に位置づけられる耳環が2点と、中世のカワラケ、珠洲焼、白磁の小片が数点出土した。このうち、中世遺物は断片的な資料が散布していたもので、集石に伴うものか判断しにくい。一方、耳環2点は暗褐色粘性シルト層の下部から多くの礫と混在して出土しており、集石に伴う遺物としてよい。

耳環は古墳時代の有力者が用いた装飾品のひとつで、考古学的には副葬品として古墳の石室内から出土することがほとんどである。そのことからすると、検出された集石は古墳時代後期に築造された古墳の石室残欠と考えて大過ないだろう。

さらに、2点の耳環の法量はよく一致しており、出土したポイントも近接していることから、両者は本来一対のものであり、大体の原位置を保っていた可能性がある。そのことを前提に検出された礫との位置関係を見ると、耳環が出土したポイントの東側に南北に並ぶ大型の礫があり、さらにその外側には中型の礫が沿うように置かれていることがわかる。耳環が出土したポイントを石室内部と仮定すると、前述した大型の礫は側壁の基底石、中型の礫は裏込石とみることができ、横穴式石室と判断できよう。特に大型の礫のうち北からの3石は西側面がよく揃っており整合性がある。また、横穴式石室は開口部を南に向けることが多く、本例もその可能性が高い。とすれば、後述する土器集中地点を墓前域として捉えることも可能と思われる。しかし、石室構造を示す他の要素は見出すことはできず、周溝なども確認できなかった。そのため、古墳の規模や形態については不明である。



集石検出状況（東から）



側壁基底石の側面（西から）※○印が耳環出土地点



耳環出土状況（東から）



图 6 集石周边状况图 (1:60)

## 2 土坑

本調査では以下の5基の土坑が検出された。

**1号土坑** 約1.9×1.6mの楕円形。検出面からの深さは約25cm。出土遺物なし。掘り込みは浅いすり鉢状で、中小の礫の上に最大長80cmを超える大型の礫が出土している。時期不明であるが、入り込む礫は集石を構成するものと同一であり、古墳が破壊された以後に作られたものと考えられる。

**2号土坑** 約1.4×1.0mの楕円形。検出面からの深さは約45cm。出土遺物なし。すり鉢状の掘り込みの中心に礫が落ち込む。1号土坑と同様に古墳破壊後に作られたと考えられる。

**3号土坑** 約0.7×0.6mの不整円形。検出面からの深さは約20cm。土師質土器の小片が1点出土。時期不明。

**4号土坑** 約0.4×0.3mの楕円形。検出面からの深さは約10cm。出土遺物なし。時期不明。

**5号土坑** 約0.4×0.3mの楕円形。検出面からの深さは約20cm。出土遺物なし。時期不明。



1・2号土坑露削状況（東から）

## 3 土器集中地点

耳環が出土したポイントから南へ5m程離れた部分で確認された。掘り込みなどの遺構は伴わず、全てが破片の状態で出土している。一部に土師器片が数点含まれるが、総体としては須恵器が圧倒する。須恵器は甕の破片がほとんどで、口縁部からは少なくとも2個体の甕が存在していたことがわかる。土師器は瓶把手が1点出土しており、他の小片もこれと同一個体と思われる。

これらの土器はおよそ6世紀末から7世紀に位置づけられ、集石と耳環の検出状況から想定した古墳の造営期間とほぼ一致する。先に集石の項でも指摘したおり、石室の開口方向にまとまるこれらの土器は、墓前域での祭祀に用いられた可能性もある。

なお、本地点から2mほど西へ離れた場所からは、本地点ほど際だった集中は認められないものの、やはり須恵器片が半径1m程度の範囲に分布しており、儀礼用の器種と考えられているフラスコ形長頸瓶の破片が出土している。このことも開口部前面で墓前祭祀が行われたことを示唆するものである。

ただし、これらの土器の多くは原位置から少なからず動いていると考えられることから、墓前祭祀の存在については、その可能性を指摘するにとどめておきたい。



土器集中地点（南から）

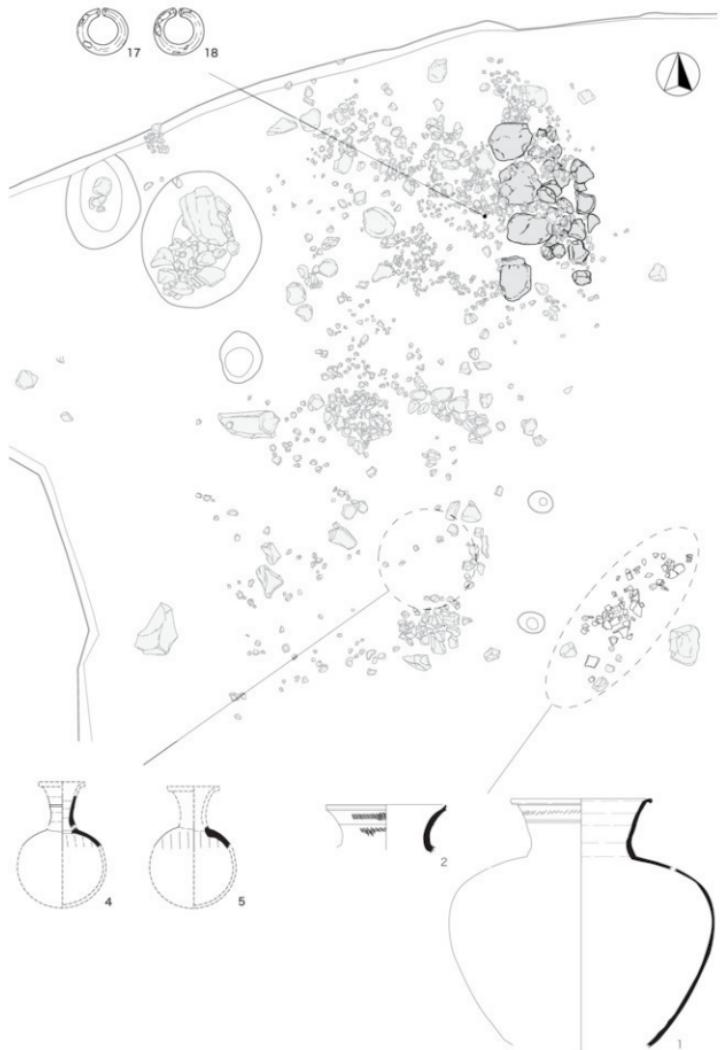


図7 古墳時代後期の遺構と遺物

### 第3節 遺物

本遺跡では、調査区北側の集石、土坑、南側の土器集中以外に明確な遺構が検出されていない。そのため、原位置を保っている遺物はほとんどない。そのうえ大半が小破片であり、時期決定はもとより器種等の認定すらも容易ではない。ある程度判明したものを表1に提示し、そのうち特記すべきものについて、以下に記述する。

#### 1 土器・土製品

須恵器甕（1-2） 調査区南の土器集中地点から検出された須恵器甕の破片は、検討の結果、少なくとも以下のふたつを識別できた。

1：大型品で、口頸部から肩にかけてと胴部の一部を復元できた。底部は確認されなかった。口径31cm、胴部最大径は推定で60cmを測る。口頸部は長く直線気味に立ち上がり、端部で外方へ開く。口縁直下に一条の、頸部中央上よりに二条の沈線が施されている。その間に籠描斜行文から成る文様帯がある。口頸部は回転ナデ調整によっている。胴部外面は平行タタキが施され、その後カキメ調整が施されている。胴部内面には、青海波状の当具痕が明瞭に残している。時期決定は困難であるが、頸部における沈線や斜行文の存在、当具痕のナデ消し調整がないことなどは、陶色編年でいえばII型式の遅い段階からIII型式にかけての特徴とすることが可能であろう（中村ほか1978）。とすれば、6世紀末頃から7世紀代に年代を位置付けることができよう。

2：1よりも小型の甕。ただし、部位が判明するのは口頸部のみである。口径は推定で22cmを測る。口頸部は緩やかに外反しながら立ち上がる。中ほどには一条の純い突帯があり、その上下に籠描波状文から成る文様帯がある。突帯が施されるという点に注目すれば、1よりも若干早い段階に位置づけられるかもしれない。

須恵器フラスコ形長頸瓶（4-6） 調査区南で検出された。胎土の様相や自然釉の色合いから同一個体と判断される破片を寄せ集めて観察した結果、1) 穿孔と釉なだれの方向が一致している、2) ロクロ口と釉なだれの方向が直行しない、といった所見を得た。こうした所見から、あらかじめ球体を作つて胴部とし側面に改めて孔を穿ち頸部を取り付けるというフラスコ形長頸瓶の破片と認定した。本遺跡では、少なくとも2点のフラスコ形長頸瓶が存在したようで、伝八雲台1号古墳出土例（豊野町誌刊行委員会2000: 41, 図1-23)を参考に推定復元を試みた。

4：接合はしないが、頸部と肩の一部が見出された。頸部高が現状で5.5cmを測る。胴部高は15cmほどになる。頸部に一条の沈線を有する。器面には広く濃緑色の自然釉がかかっていたようで、特に頸部では内部まで及んでいる。

5：肩の一部のみ見出された。器面には緑色の自然釉がかかっている。胴部高は15cmほどになろう。他に胴閉塞部の破片と思われるものがあり（6）、本例の一部であった可能性もあるが、定かではない。

フラスコ形長頸瓶は、東海地方で7世紀に盛んに生産され（高橋2009: 88-89)、東日本を中心に各地に広がる。ほとんどの場合、古墳および横穴からの出土であり、喪葬儀礼に用いられた特別な器種とみなされている（池上1985: 11, 32)。破片とはいって、本遺跡に7世紀代の古墳が存在したことを裏付ける重要な資料である。

羽釜形瓶（7） 土師質で、わずかながらタタキ調整の痕跡が見える。口のすぼまる器形が想定されるが、径の大きさやタタキ調整の存在から、羽釜形瓶の底部破片と判断した。底径は推定で18cmである。羽釜形瓶は、長野県理藏文化財センターが調査した松原遺跡において多数出土しているが、いずれも同遺跡における古代土器編年の6段階から13段階に相当するという（上田ほか2000: 435)。これにしたがえば、本例も9世紀から11世紀初め、平安時代の所産となろう。

カワラケ（8-10） 全て小破片であるが、時期の異なる二種類が判別可能である。

8・9：口縁が内湾して立ち上がるも。底部には不明瞭ながら回転系切痕が見えている。胎土は灰褐色である。

8は推定口径7cm、器高1.5cmを測る。更埴条里遺跡群・屋代遺跡群の発掘報告書におけるカワラケ分類の「ロクロカワラケ①」に相当するものと考えられ、13世紀から14世紀後半のものであろう（市川ほか2000：147-48）。

10：口径5cm、底径3.2cmの小型品。遺存状態は良好で、ほぼ完形に近い。胎土は緻密で、白褐色である。口縁は若干外反気味に立ち上がる。底部には回転系切り痕が残る。こうした特徴から、上述の分類における「ロクロカワラケ③」に相当するものと考えられ、15世紀後半から16世紀前半のものであろう（市川ほか2000：148）。

瀬戸・美濃産折縁皿（13） 重機による掘削の際に検出された。小破片であるが、特徴的な縁を有し、また印花文が見られることから、藤澤良祐による瀬戸美濃の編年における大室第4段階の折縁皿（C類）と判断できる（藤澤2002：154）。大室第4段階の年代は、紀年銘資料によって1590年頃から1610年代初頭に当たっている。

壁土断片（15） 排土中から回収されたもの。木舞の痕跡（竹？）が見えており、家屋あるいは塀の壁土の断片であろう。表面に焼けた部分がある。本遺跡では、他に同様のものは確認されていない。

## 2 石製品

石臼（16） 排土中から回収された安山岩製の上臼で、半分のみ遺存する。直径は推定で31cmである。目は六分割、供給口は隅丸方形を呈するものと思われる。類品が中世遺構からしばしば出土する。ただ、本例に関しては、明確に遺構に伴うものではないので、中世の所産と断定することは難しかかもしれない。

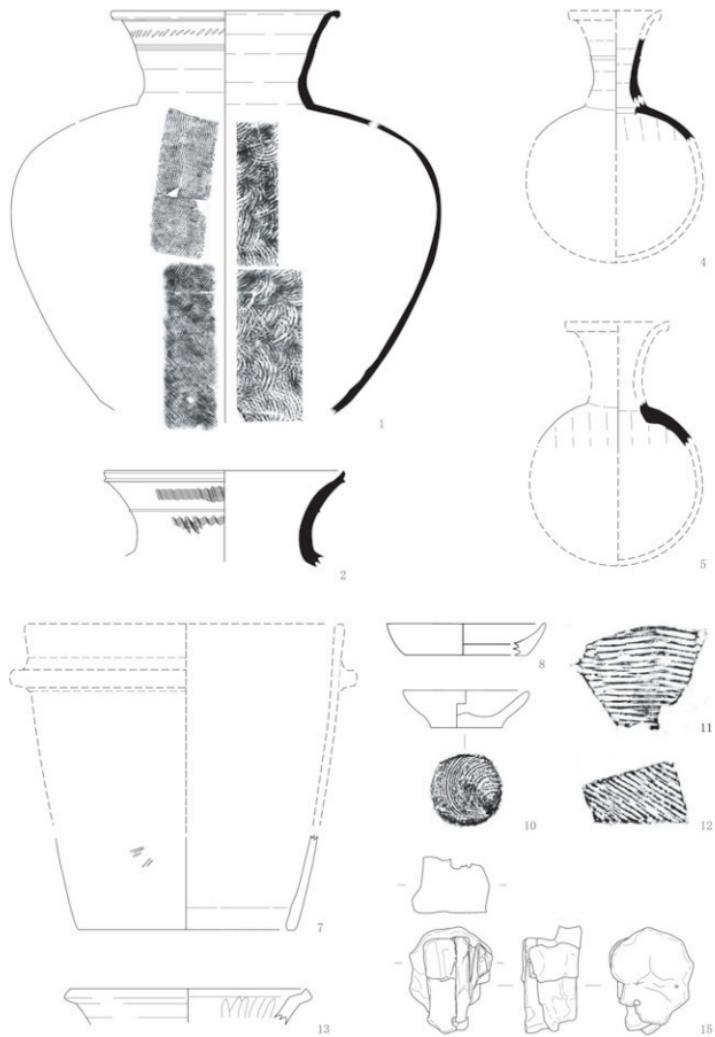
## 3 金属製品

耳環 2点出土したが、双方とも保存状態は良好である。銀製品であるが、割れ目から緑青が見えており、銅芯とわかる。両者とも内径1.4cm、断面径0.4-0.7cm、切れ目幅0.1cmを測る。法量の一一致から、両者は対であった可能性もある。後期古墳の副葬品として通有のものであることから、上述のフラスコ形長頸瓶とともに、本遺跡の性格を物語る資料といえる。

棒状鉄製品（19） 断面円形の棒状を呈し、鈍を有する。一方の端部には破損が見られる。長さ26cmを測る。類例も検索し得ず、性格は不明とせざるを得ない。

表1 出土遺物観察表

No.	出土地点	種別	器種等	残存状況	時期
1	土器集中	須恵器	甕	口縁～胴部	古墳後期
2	土器集中	須恵器	甕	口頭部破片	古墳後期
3	土器集中	土器	甕	把手～胴部破片	古墳後期
4	1段式横糞	須恵器	フランコ形長頸瓶	口頭部～肩部	古墳後期
5	1レバーチナ	須恵器	フランコ形長頸瓶	肩部～直	古墳後期
6	調査区南一一下面	須恵器	フランコ形長頸瓶?	胴部破片	古墳後期
7	調査区南一一下面	土器部	羽冠形瓶	底部破片	平安
8	調査区南一一下面	カワラケ	皿	破片	中世
9	調査区南一一下面	カワラケ	皿	破片	中世
10	調査区南一一下面	カワラケ	皿	ほぼ完存	中世
11	集石	珠洲焼	甕	破片	中世
12	調査区北	珠洲焼	甕	破片	中世
13	検出	瀬戸・美濃	折縁皿	口縁	中近世
14	集石	白磁	皿?	破片	中近世
15	検出	土製品	壁土	破片	不明
16	検出	石	上臼	2分の1	中世?
17	集石	銅芯娘妻	耳燈	完存	古墳後期
18	集石	銅芯娘妻	耳燈	完存	古墳後期
19	検出	鉄	棒状鉄製品	完存?	不明
20	集石	鉄	板状鉄製品	破片	不明



※ 縮尺 1 (1:6) 、8・10・11・12・13 (1:2) 、その他(1:4)

図8 土器・土製品実測図および拓影

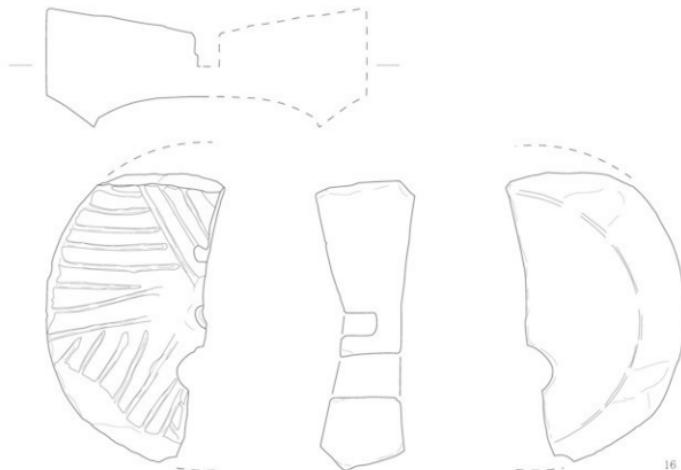


図9 石製品実測図 (1:4)

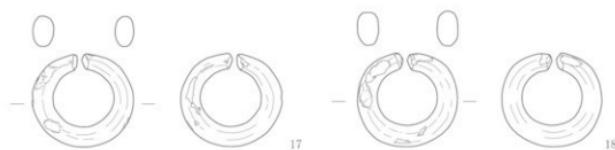


図10 金属製品実測図 (1:1)



棒状鉄製品X線写真

## 第IV章 結語

今回の調査の結果、埋没古墳の残欠と考えられる集石が発見され、耳環一对が出土したほか、集石範囲からやや外れたところでは、およそ6世紀末から7世紀に位置づけられる須恵器の大甕とフラスコ形長頸瓶の破片が集中して出土した。耳環やフラスコ形長頸瓶は約200m南東に位置する八雲台1号古墳の副葬品（現在は上伊豆毛神社宝物として伝わる）にも共通している。古墳の規模や形態を直接的に示す遺構は確認できなかつたが、発見された遺物や残された礫の配置などにより、集石がもともと古墳時代後期の横穴式石室を有する古墳であったことはほぼ間違いない。そこで、今回発見された古墳について、聖林寺1号古墳と命名しておきたい。なお、調査地の字名は東宇山であり、本来は字名を名前に冠することが適當かと思われるが、調査地から100mほど南に下ったところに、すでに湮滅してしまったものの、東宇山古墳として周知された後期古墳が存在することから、混同を避ける意味で上記の名称としたものである。

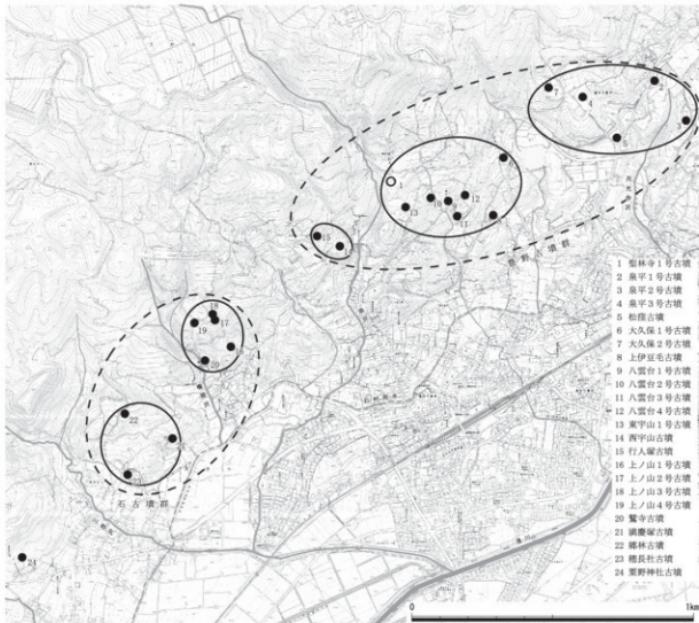


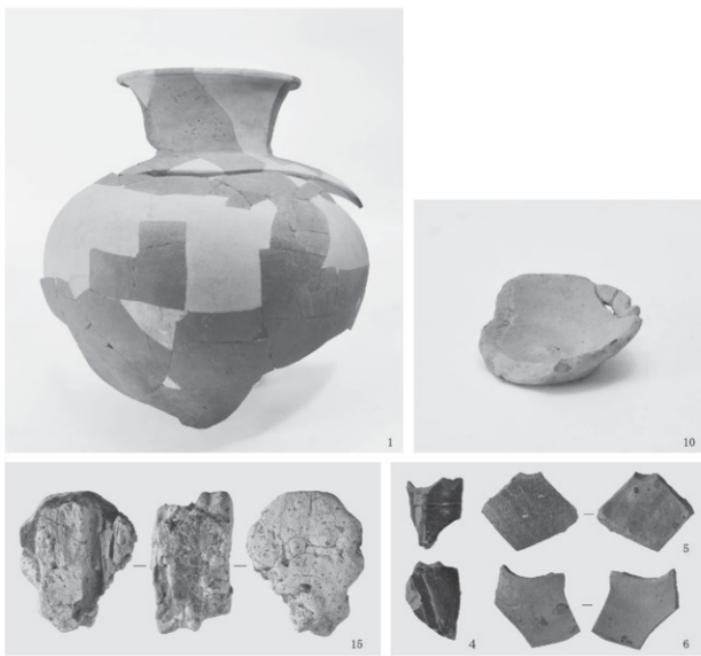
図11 豊野周辺の後期古墳の分布

旧豊野町域における古墳時代後期の古墳分布については、第II章第2節で述べたとおり、鳥居川流域の鳥居古墳群・泉平から油沢川流域まで展開する豊野古墳群、そして石周辺に分布する石古墳群に大別される。さらに詳細に古墳時代後期の古墳分布図を見ると、その分布からは幾つかの小群を見出すことができる。すなわち、豊野古墳群については、泉平1～3号古墳・大久保2号古墳からなる泉平小群、今回発見された聖林寺1号古墳のほか、東宇山古墳・八雲台1～4号古墳・上伊豆毛古墳・大久保1号古墳からなる東宇山小群、西宇山古墳・行人塚古墳からなる西宇山小群の3小群に、石古墳群については、上ノ山1～4号古墳・鷺寺古墳からなる上ノ山小群、満慶塚古墳・郷林古墳・徳長社古墳からなる大石小群という2小群に分けられるのである。この編成はあくまで地図上のまとまりから得られたもので、このようなまとまりが果たして有意な歴史性をもつのかについては、出土遺物や古墳そのものの諸属性など考古学的見地から十分に検証されねばならない。特に居住域が一定地に制限されやすい豊野地域にあっては、特定集団の墓域である古墳群のまとまりを抽出することで、道営集落との対応が可能となり、古墳に埋葬された人物像の解明や、ひいては古墳時代後期から終末期にかけての墓制研究にとっての大きな一助となるだろう。その意味で、これまで未発見であった埋没古墳が発見されたことは、大きな成果であったと考える。ただし、集落、古墳ともに調査事例が少ない現状においては、これ以上の指摘を為し難い。今後の調査の進展を期したい。

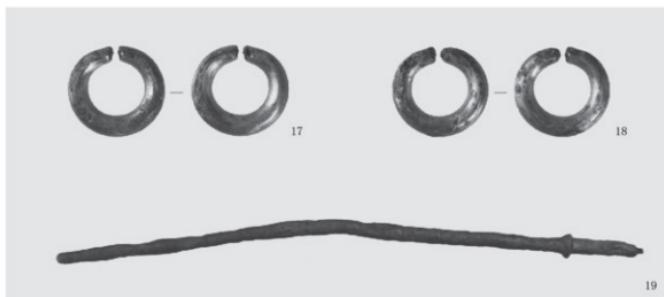
なお、当初期待された「聖林寺」に関する明確な構造や遺物については今回の調査では発見されなかつた。しかし、中世遺物が少量ながら出土していることは、その時期に周辺で何らかの活動があったことを示している。また注目されるのは、聖林寺1号古墳が位置する小丘陵が、古墳造営の後に大規模な地形の改変を受けている点である。この改変に伴う明確な構造や遺物は確認されておらず、いつ改変がなされたのか、一度に大きく改変されたのか、あるいは数回にわたって断続的に行われたのかなど、詳細については不明のままである。しかし、本来は古墳の石室構築材であった礪が、そうした諸々の活動によって最終的に集石として形成されたとするならば、礪の多くが原位置を失って検出された状況にも歴史的意味があつたと考えたい。

#### 〔引用・参考文献〕

- 池上悟1985『古墳出土の須恵器について—フラスコ形提瓶—』『立正大学人文科学研究所年報』23: 8-34.  
市川桂子ほか2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書27 更埴条里遺跡群・星代遺跡群（含む大境遺跡・猪河原遺跡）一古代2・中世・近世編一』長野県埋蔵文化財センター  
上田典男ほか2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書6 長野市内その4 松原遺跡—古代・中世—』長野県埋蔵文化財センター  
牛山佳幸1994『太田莊における中世佛教の展開—鷲寺・聖林寺・神護寺・極楽寺の歴史的意義—』『信濃国太田莊調査報告書（1）』豊野町教育委員会  
倉石和彦・小山丈夫・入沢昌基1997『聖林寺跡伝承地試掘調査』『信濃国太田莊調査報告書（II）』豊野町教育委員会  
高橋透2000『東日本太平洋沿岸地域出土須恵器フ拉斯コ瓶の編年—湖底層を中心に—』『考古学集刊』5: 75-97.  
豊野町誌刊行委員会1997『豊野町の自然 豊野町誌1』豊野町誌刊行委員会  
豊野町誌刊行委員会2000『豊野町の歴史 豊野町誌2』豊野町誌刊行委員会  
豊野町誌刊行委員会2001『豊野町の資料 豊野町誌5』豊野町誌刊行委員会  
長野県1973『長野郡町村誌 北信篇』  
中村浩ほか1978『陶邑III』（大阪府文化財調査報告書第30輯）大阪府教育委員会  
藤澤良祐2002『瀬戸・美濃大糸編年の再検討』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』10: 53-175.



土器・土製品（縮尺不同）



金属製品（縮尺不同）

報告書抄録

ふりがな	しょうりんじあさ
書名	聖林寺跡
副書名	広域營団地農道整備事業上水内北部地区油沢橋梁工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第128集
編著者名	塙原秀之 柳生俊樹
編集機関	長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センター
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106
発行年月日	2011(平成23)年3月31日

長野市の埋蔵文化財第128集

## 聖林寺跡

平成23年3月10日 印刷

平成23年3月31日 発行

編集 長野市教育委員会  
発行 文化財課埋蔵文化財センター  
印刷 明和印刷株式会社